

県立高校「未来の学校」構築事業

研究開発最終報告書

実践校種別	学校名
その他の実践校 (自治の追求により骨太のリーダーを育成する高校)	松本深志 高等学校

1 実施期間

令和2年4月1日～令和7年3月31日

2 研究開発計画（令和元年度策定）の概要

(1) 構想名
“自治の校風”を追求し、その理想の具現化により、骨太のリーダーを育成する学校づくり
(2) 研究開発の実施対象
全日制課程 普通科 全学年
(3) 研究開発の目的と目標
<p>① 目的</p> <p>ア 自治の精神に基づく生徒による主体的な活動を通して、社会を支える高い志とグローバルな視野を持ち、自分を取り巻く社会の諸課題の解決に対して他者と協働して意欲的に取り組むことのできる、骨太なリーダーを育成する。</p> <p>イ 生徒の学びのモチベーション高揚を図り、すべての生徒の進路実現につなげる。</p> <p>② 目標</p> <p>生徒・教員が“自治とは何か”を問い続け、その理想をすべての場面で追求・具現化することにより、自治を内面化し、高い志や使命感、未解決の課題への挑戦心、学問的真理を追究する意欲等の資質・能力を身につけ、他者と協働して新たな価値や社会を創造できる骨太のリーダーを育成するため、以下の3項目の実現を目指す。</p> <p>ア 学びの意欲の向上</p> <p>イ 自治の精神の内面化</p> <p>ウ 学校全体の活力向上</p>
(4) 研究開発概要（目標を達成するための具体的取組や方策）
<p>現在の教育課題の解決を目的として、既存の考え方にとらわれない発想で、学校や地域の 特長・魅力を活かし、多様で柔軟な学びの仕組みを創造する。</p> <p>① 骨太なリーダーの育成</p> <p>② 探究活動の充実</p> <p>ア 信州大学連携ゼミ（対象：1学年）の実施</p> <p>イ 深志教養ゼミ（対象：2学年）の実施</p> <p>③ 生徒会活動、クラブ活動等の自主活動の奨励</p> <p>④ 長期的視点に立った研究開発体制づくり</p>

3 最終年度の研究開発計画（令和元年度策定）における目標や目的の達成状況について

この5年間、目的を果たすために、以下の3項目の実現を目指して事業展開してきた。

1) 学びの意欲の向上

生徒の学びへのモチベーションを向上させるため、「知の探究」と「課題探究」を二本柱とする探究活動を実施した。「知の探究」の要となったのが「信州大学連携ゼミ」「深志教養ゼミ」「同窓生特別講義」である。中でも「信州大学連携ゼミ」では、教科書の枠を

超え、教育学・認知科学・天文学・まちづくりといった様々なテーマから、生徒は自分の興味関心をもとに少人数のメンバーでゼミを構成し、信大教授や大学院生、社会人などからの支援も受けながら、「新しい価値の創造と発見」といった共通テーマのもと、普段の授業とは異なる学習環境の中で、高度で最先端の学問に触れることで、ワンランクアップしたリアリティのある学びを体験することができた。また、「課題探究」においては、社会とつながって今の学びを活かすことで、普段の教科学習の必要性を改めて感じることもできた。

【令和2年度】

- ・新型コロナウイルス感染症対策のため、大幅な見直しをせざるを得なくなった。しかし、「信大連携ゼミ」を中心に据え、大学院生などにも関わってもらうことで、生徒のハイレベルな学びへの意欲喚起と、課題研究を進める上での手法を身につけることにつながり、探究活動を充実させることができた。
- ・1年課題探究では、生徒たちが積極的に取り組む姿勢がみられた。すでに、環境問題について校外での活動実績のある生徒などもおり、グループ発表の機会等を通じて、生徒たちがお互いに良い刺激を与えあうことにつながった。
- ・1年課題探究のまとめ・発表では、各生徒が動画を作成し、互いに視聴・評価し合った。想定以上に質の高い内容の発表を行う生徒もおり、相互評価を通して生徒たち個々の気づきにつながる学習活動となった。
- ・信大連携ゼミを通して生徒の「学習観」「協働作業認識」「学習に対する価値認知」等がどのように変容するかについての定量分析（事前調査・事後調査・遅延調査）を実施した。分析の結果、論理的思考を遂行する自信が高まったり、学校での学習に面白さや楽しさを抱くようになったりしたことがわかった。
- ・2年課題探究でも、次年度は「深志教養ゼミ」を設定し、「課題探究テーマ」に取り組むゼミ活動を実施することにした。

【令和3年度】

- ・2年課題探究では、「深志教養ゼミ」を設定し、中には生徒が自主的ゼミ活動を進める講座（自主ゼミ）も開講された。
- ・新型コロナウイルス感染症の影響は続いたが、「信大連携ゼミ」と「深志教養ゼミ」を中心に据えた生徒の課題探究を進めることができた。ともに、生徒のハイレベルな学びへの意欲喚起と課題研究を進める手法の獲得につながった。
- ・1・2年ともに、課題探究のまとめ・発表は、動画の作成と相互評価する形態で行った。
- ・「信大連携ゼミ」を通して生徒の「学習観」等がどのように変容するかについての定量分析（事前調査・事後調査・遅延調査）を実施した。分析の結果は昨年度と同様であった。効果をもたらした要因は、大学での学び、少人数、対話的な学び、の要素が影響したものと考えられる。

【令和4年度】

- ・「信大連携ゼミ」及び「深志教養ゼミ」を中心に据えた生徒の探究活動を前年度と同様に進めることができた。
- ・「信大連携ゼミ」を通して生徒がどのように変容するかについての定量分析を実施した。概ね昨年度調査結果を上回る数値を出していた。骨太のリーダーの醸成は徐々に生成

されつつあると考えられる。一方で、年次が上がるにつれて減少する学習価値観の幅を如何に小さくしていくかが課題である。また「自治」及び「リーダー」に関するテキスト分析の結果とともに、「部活加入」と「生徒会参加」の効果検証を行う予定である

- ・現在は個人探究の形をとっているが、次年度以降はグループ探究や、学年の枠を超えた探究活動を模索し、「他者との協働」の育成を目指したい。

【令和5年度】

- ・「信大連携ゼミ」を中心に、「深志教養ゼミ」、「同窓生特別講義」等を行うとともに、オンラインでの活動も充実させながら課題探究学習を進めることができた。成果発表については、校外施設でのポスター掲示やクラウドサービスを活用して、学校外への発信、文化祭や体験入学で進捗状況を含めて情報発信を行った。また、相互評価等、評価活動も工夫し、生徒たち個々の新たな気づき生まれるように工夫した。
- ・生徒の「部活加入」と「生徒会参加」が、どの程度生徒の資質・能力の変容に影響しているか、「信大連携ゼミ」で行ったアンケート結果をもとに定量分析を行った結果は以下のとおりである。

1) 批判的思考態度について

- 時期や学年を問わず、部活や生徒会に参加している深志生ほど客観性等の効果が高い
- 時期や学年を問わず、事後の方が論理的思考への自覚の効果が高い
- ▲生徒会に参加している深志生ほど事後において探究心が低下

2) 課題価値について

- 時期や学年を問わず、部活加入者数が多い深志生ほど課題価値の効果が高い
- ▲学年を問わず、事後において興味価値は低下

3) 進路自己効力

- 時期や学年を問わず、部活加入者数が多い深志生ほど教育的進路と人生的進路に関する自己効力の効果が高い
- 3年生は事後に職業的進路及び人生的進路に関する自己効力が上昇

- ・「信大連携ゼミ」をはじめとする、特に「知の探究」に係る取組により、生徒会や部活動で積極的に関わっている生徒ほど資質・能力の伸長の効果が高いとの結果がうかがわれたが、生徒会や部活動に加入することで資質・能力が伸びるとまでは言えない。しかしながら、特に生徒会や部活動を通じて後輩に継承されていく自治の伝統が、今後「信大連携ゼミ」及び「深志教養ゼミ」を中心に据えた「知の探究」の場面でも縦のつながりのもとに継承されていくことで、「学びの意欲」のさらなる向上が図れるものと推測される。また、1年生から2年生にかけて「進路自己効力」「批判的思考態度」「課題価値」がともに深まっている傾向が見られ、「信大連携ゼミ」での学習活動が影響していると考えられる。しかしながら、元々「批判的思考態度」や「課題価値」、「進路自己効力」の水準が高い生徒が集まってきており、そうした生徒を対象に効果を検証することはそもそも難しく、また一つひとつの事業の取組と特定の資質・能力の育成を結び付けて評価することにも限界があると考えられ、客観的な評価が課題となっている。
- ・本校卒業生による特別講義では、9割以上の生徒が自分の進路選択に役立ったと評価しており、また知のモチベーションの向上につながる大きな励みと気づきにつながっ

た。このことから、引き続き有益な事業として継続が望まれる。

- ・令和5年度、探究活動の見直しを行ったが、かなり粗削りであり、ブラッシュアップが必要である。加えて、生徒会・部活動で「伝統」となっている、学年の枠を超えた縦割りの継承システムを、探究活動を含めた教科学習にも導入できないかについて、次年度の課題である。
- ・事業終了後の自走を見据え、持続的なシステムを構築する必要がある。
- ・「深志らしさ」の広報も課題である。

【令和6年度】

- ・これまでの成果と課題を踏まえ、以下の2点を重点課題とした。

1. 深志らしい探究活動とは？

教科学習で身につけた力がどう世の中と結びつくのか、自分がどうやって社会で活躍するか、…これらを、探究学習を通じて外とつながることで経験させる

2. 全教職員が同じようにコミットできる仕組みづくり、目線づくり

全職員が共通認識と理解をもって取り組める3年間の「深志探究プログラム」作り

1年…前年度のルールをベースにブラッシュアップ

2年…近い探究テーマごとのゼミ形式による授業運営、ゼミ長会

3年…国語・社会・英語、音楽・書道・美術による横断的な探究学習

2) 自治の精神の内面化

「自治の追求により骨太のリーダーを育成する高校」づくりに向けて、改めて「深志の自治とは」「リーダーとは」について、「自治の検証」共同研究者らとともに考え直す機会を得た。

【令和2年度】

- ・『自治の精神』を活かした教育検証については、オンラインによる教員研修会を実施した。民主的な政治的主体を育成するための「卓越性の追求」など、本校がめざす教育の方向性に、新たな視点を得ることができた。

【令和3年度】

- ・令和3年5月に実施した「学びの指標」生徒アンケートでは、生徒の多くが「自分なりの価値観や考え方を持つ」と回答した。学校生活をとおして生徒たちがどのように変容していくかを捉え、本校が目指す「リーダー像」「骨太のリーダー」をより具体化させていきたい。

【令和4年度】

- ・「自治の検証」事業については、研究成果を令和5年5月に出版する運びとなった。
- ・令和4年5月に実施した「学びの指標」生徒アンケートでは、生徒の9割以上が「自分なりの価値観や考え方を持つ」と回答した。

【令和5年度】

- ・「自治の検証」事業の報告書として刊行された『深志の自治』では、部活動など自主的活動において「自分たちで創る」「当事者の立場から降りない」「解決を第三者に任せない」といった自治の精神が培われ、それが先輩から後輩へと脈々と受け継がれるシステムにより現在につながっていることが示された。また、教師は生徒自身の判断と行動を

陰に陽に支える存在（教師の見えざる手）として、基本生徒主体で、否定しない存在としてあり続けたとされた。

- ・1年生で新たに「探究型キャリア研修」をスタートさせた。学校で用意した研修先にとどまらず、生徒が自ら設定した研修、訪問先の開拓を可能にしたことで、「学びの意欲向上」「自治の精神の内面化」につながる手応えを、生徒は感じ取ることができたと考えている。
- ・「自治」「骨太のリーダー」の資質・能力の明確化、共有化は、課題として残ったままであったが、明確化する過程を通して、生徒及び職員の共通理解が深まり、より高いレベルの成果が生み出されるものと期待される。

【令和6年度】

- ・「自治の文化」を探究学習にも取り入れ、「縦割りでの探究活動」「探究係生徒による探究授業運営」に取り組む。

3) 学校全体の活力向上

探究活動のようなソフト面だけでなく、改組などハード面での改革も行い、組織として学校が抱える課題に対応できるように改革を進めた。また、外へ発信・つながる活動を通じて自校だけは得られない深い学びの機会を得ることができ、学校の活力向上につなげることができた。

【令和2年度】

- ・「探究学習・キャリア教育部」を創設し、学校全体で探究活動の充実に取り組めるように改組を行った。
- ・探究活動を大学関係者とともに進めることで、本校教職員にとっても指導改善の参考となり、得るものが多かった。
- ・探究活動の成果を生徒・保護者全体で共有するため、外部施設を利用した研究発表会の実施等、研究発表機会の充実が課題である。

【令和3年度】

- ・対外的な成果発表活動として、松本市役所に協力いただき、2学年がポスター掲示を行うことができた。

【令和4年度】

- ・対外的な活動として、2学年のキャリア研修旅行で広島県内の4校と交流し、さらに年度末には広島県立国泰寺高校の探究学習発表会に本校生徒も招かれ、対面で発表を行うことができた。
- ・「信州つばさプロジェクト」に参加してオランダやマレーシアに行ったり、軽井沢で行われた「未来へつなぐ SDGs 高校生ワークショップ」に参加したり、中信地区探究フェスティバルに参加したりと、積極的に活動することができた。
- ・文化祭、中学生体験入学、公開授業でポスター展示発表を行った。

【令和5年度】

- ・生徒の探究活動においては、探究コーディネーターの力も借りながら、自校の職員の力だけでは賄えない学びの機会を得ることができた。探究コーディネーター導入は、生徒の探究の質の向上にとどまらず、まずは探究・キャリア教育部の係員の意識を変え、そ

これから教員集団の探究学習に対する意識の変容を促したものと感じている。そのことが「学校全体の活力」の向上につながったと考えている。

- ・これまでの本校探究活動を抜本的に見直すとともに、カリキュラムマネジメントや運営教員の意識向上など様々な取組を行った。成果の発信は、第1回長野県探究フェスティバルで発表した。
- ・生徒による成果発信としては、文化祭、中学生体験入学、公開授業でのポスター展示発表、中信地区探究フェスティバルでの発表等を挙げるができる。
- ・組織で探究活動を展開できるよう、3年間の系統だった探究学習プログラムの開発に着手をした。また、自治の校風を追求し、そのシステムが課外活動のみならず、知の探究や課題研究でも活かされていくこと意識したソフト開発を行った。未解決の課題への挑戦心、学問的真理を追究する意欲等の資質・能力を身につけ、他者と協働して新たな価値や社会を創造できる骨太のリーダーの育成につながっていくといったイメージを、より明確にもてるようになったと考えられる。
- ・探究学習・キャリア教育部の活躍により、探究活動を中心とした「未来の学校」構築事業の様々な取組が、一部の担当係の人だけが推進している事業ではなく、全職員で関わって進めているとの意識付けにつながってきた。
- ・また、例えば信州大学連携ゼミ等の取組が単にその日だけのイベントとしての位置付けではなく、生徒の学びへのモチベーションを向上させ、そのことが探究活動も含めた学びの質の向上を生み出しているといった成果を、教員が実感してきている雰囲気を感じることで、通常の教科指導においても、探究的な学びを取り入れた授業改善をすすめるようとしている教員が現れてきた。

【令和6年度】

- ・令和5年度までの成果を踏まえ、良さを延ばしながらも、無理なく運営できるシステム開発に取り組む。

4 研究開発と学校全体の教育活動の改善・改革との関連づけ

5年前、当時の本校では、入学後、受検勉強に疲れ果てて目的を失ったり、周りの生徒は賢く、授業進度も早くてついていくのがやっとなので、自分はこんなにできなかったのかと自信を無くした生徒が多くいたりした、そんな状況であった。また、授業以外は楽しいけれど、学ぶことの楽しさを味わうような機会がなく、学びへのモチベーションは低下してやらされ感、停滞感があった。しかし一方で、家族、世間、社会からは、リーダーとしての進路や活躍を期待され、生徒は大きなストレスを抱えていたと言える。

そうした状況を打開し、先行きが不透明で、将来の予測が困難な時代のリーダーを育成するために、深志生の求めるリーダー像を明らかにし、そうした骨太のリーダーを育成するための学びのスタイル構築に取り組むことが本校の課題であった。

そうした状況を打開し、先行きが不透明で、将来の予測が困難な時代のリーダーを育成するために、「未来の学校」構築事業に参画し、深志生の求めるリーダー像を明らかにし、そうした骨太のリーダーを育成するための学びのスタイル構築に取り組むことになった。

求められるリーダー像については、アドバイザーの荒井先生のご協力をいただきながら明確化を図った。調査結果から浮かび上がってきた生徒が考えるリーダー像は、かつてのワンマ

ンでトップダウン型のリーダーではなく、調査力や協働性に富み、自由であっても自分勝手ではない、ファシリテート力やプロデュース力を兼ね備えた、クリエイティブでクリティカルなリーダーであった。教員が考えるリーダー像も同様で、本校の学びの方向性は「自治の伝統を生かし、主体的、創造的、批判的で、調整力を持ち、社会のウェルビーイングに資することができる力を、生徒自らの行動により醸成したい」というものに集約されていく。

また、大学の研究者を中心とした「自治の検証」共同研究者による分析においても、そうしたリーダー像を追い求めてきた先輩方の取組や学校運営の様子が紹介され、自治の追求により骨太のリーダーを育成する取組は、本校がこれまで大事にしてきた自治の伝統との親和性が非常に高いものであることに改めて確信を得ながら、現在まで取組を進めている。

本校の研究開発の目標である「学びの意欲の向上」「自治の精神の内面化」「学校全体の活力向上」の実現を目指す際のポイントは、自治の伝統を大事にしながら、

- ・現在の学びと将来の学びの深い関連性を理解する
- ・学びへのモチベーションを上げることで、受験に向かう意欲・精神も高める

という点であるという考えに至った。では、具体的にどのような取組が考えられるか。その大きなカギになる、と考えたのが「探究」の改革であった。探究活動を通して、「やらされ感」から「やりたい感」へと生徒の意識改革を図れるのではないかと考えたのである。教科書の枠を超え、社会とつながり現在の学びを活かすこと（課題探究）で、教科学習の必要性を感じる。また、高度で最先端の学問に触れること（知の探究）で、興味関心が掻き立てられ、学びへのモチベーションが上がる。そうした学びを可能にするのが、深志の探究の方向性であるとの共通理解が進んだ。そこで本校では、その探究に大きく2つの柱を立てた。それが「知の探究」と「課題探究」である。

これまで、「探究の改革」を中心に研究開発と学校全体の教育活動の改善・改革との関連づけについて述べてきたが、あわせて「授業の改革」もすすめてきた。学校生活の大半を占める授業においても骨太のリーダー育成に向け、探究学習で行われる直接対話型や ICT 機器を使った協働的な学び、グループ学習等が積極的に導入され、探究学習との相乗効果が生じている。

5 研究開発で明らかになった課題及び改善方策

(1) 探究活動の運営

校務分掌に探究学習・キャリア教育部（以下、探究部）を位置付けたものの、当初は「各学年の探究係教員任せ」であり、学校全体として「探究で何を学ばせるのかの意識共有」が持たず、一部の教員が孤立し、過重負担がかかるという状態であった。また、生徒においても、探究の意義や探究サイクルの回し方などの理解やマインドセットが足りないまま探究活動をスタートさせていたため、「調べ学習」「アンケート調査程度のやっつけ活動」に終わってしまう傾向が見られた。2年次にはよりブラッシュアップした探究に高めていくところであるが、教員の手が回らず、逆にくオリティが下がってしまった例も見られた。

そこで、4年目からは、探究部が一丸となって学校全体の旗振り役となり、探究活動に取り組む雰囲気や学校全体に醸成し、職員全体が深志らしい探究活動を考え支え、「骨太なリーダー」育成につながる探究活動を目指して探究のベースの構築に着手した。具体的には、以下の取組が挙げられる。

- ① 探究部メンバーは「学年」の探究係ではなく、「学校」の探究係に
探究部職員全員が、所属学年を中心に学年の枠を越えて情報を共有し、互いに運営サポートにあたるように意識を変えた。
- ② 定例部会の設定
(1)を実現するため、部会を定例で開催するようにし、意見交換やアイデア出しを活発に行うことで、担当者の原案作りを下支え、仲間意識を醸成し、学年会を通じて各学年での学びをスムーズに連携できるようにした。
- ③ 学年会での模擬授業
また、探究部が先生役を務め、その他の正副担任が生徒役となり、模擬授業を体験することで、実際授業の場面で生徒を安心してファシリテートできる準備を行うようにした。単に授業の準備にとどまらず、副担任もメインに関わることで、職員全体が探究活動の当事者となり、共通意識を持てるようにした。
- ④ 職員全体での探究への意識醸成
Google Classroomに「探究」「職員」の部屋を作成し、職員全体で探究に係る情報を共有するだけでなく、職員の興味関心リストや人脈・授業実践のアイデアを共有し、探究部員だけでは解決できないこともすべての職員から力を借りられるようにした。今後、探究の授業から教科の授業計画、評価方法、進路指導、教育課程へと、またその逆も影響を及ぼし合うような展開を期待している。
- ⑤ 探究新聞の発行
情報の共有は、職員だけではなく、生徒、保護者、そして今では同窓会とも共有し、学校全体で探究活動を推進できるように、「探究新聞」を発行した。各学年の取組、校外で活動する生徒の様子などを紹介し、情報共有に努めた。
- ⑥ 探究コーディネーター（外部人材）の招へい
探究部員をはじめ、職員の負担軽減や人脈の限界に対応するため、「探究コーディネーター」を外部から招へいすることとした。授業案作りサポート・打合せの他、各回の巡視・指導、講義、他校との連携調整などをお願いした。本校だけで成し得ない、活動の広がりやクオリティの深化をもたらしてくれた。

(2)「自治の追求」による研究開発

自治の校風は、本校で脈々と受け継がれてきているが、定まった定義や伝承の仕方があるわけではない。しかし、なぜ長い間受け継がれてきたのか、「自治の検証」事業の報告書として刊行された『深志の自治』中で分析されているが、要素として考えられることとしては、部活動など自主的活動において「自分たちで創る」「当事者の立場から降りない」「解決を第三者に任せない」といった自治の精神が培われ、それが先輩から後輩へと受け継がれるシステムがいつしか出来上がったこと、また、教師は生徒自身の判断と行動を陰に陽に支える存在（教師の見えざる手）として、基本生徒主体で、否定しない存在としてあり続けたこと、といったことが挙げられる。そうした校風の中で、自ら考え、他者と協働することができ、将来社会を支えるようなリーダーを多く輩出してきた。そうした、主に部活動や生徒会活動で培われてきた自主的な文化を、教科活動のみならず、探究活動にも取り入れることができれば、生徒の学びのモチベーションは向上し、一人ひとりの「好き」や「楽しい」、「なぜ」をとことん追求できる学びが教育活動全体に広がり、将来的には生徒や教員が入れ替わっても受け継がれていくよう

な文化になっていくと考え、研究開発を進めた。

具体的には、探究学習において「縦割り」による学びを導入した。1・2年が共に学び合う機会を積極的に設け、学年の枠を超えた学習集団を形成した。また、2年生は探究のテーマごとにゼミをつくり、そのゼミ長を中心とした探究活動の運営を試みた。詳しくは、令和6年度の実績をご覧いただきたい。教員についても、「見えざる手」による支援ができるよう、全員がゴールの姿を共有し、生徒とともに学びを深める姿勢を意識してあたれるように、探究部がリーダーシップを発揮した。

しかし、教員がお膳立てしたシステムを生徒が自然に受け入れることは難しく、課題も感じている。

(3) 研究開発の評価

探究部を中心に、試行錯誤しながら研究開発を進めているが、その取組により成果が上がっているのか、その評価方法は課題として残っている。生徒の「学習観」「協働作業認識」「学習に対する価値認知」と各種取組を1対1の関係として紐づけることは難しい、取組の成果は総合的な力として表れてくる、5件法などのアンケートでは肯定的な評価に偏りがちで実情を上手に反映できないのでは、ということは議論された。また、「深志の自治」とは何か、「深志らしさ」、「骨太のリーダー」の像に関わる全ての人々が共有できていることの重要性についても確認された。

6 次年度以降の成果普及の取組と自走計画

(1) 成果の普及

この5年間で、生徒の学びのモチベーションは向上し、自治の精神に基づく生徒による主体的な活動についてその価値と実行が見直され、学校全体の活力は向上してきたとの手ごたえを感じている。生徒ともに歩んできた道のりは、実際にご覧いただくのが一番であると考えており、今後も積極的な視察の受入れを行っていききたい。これまで、県外から令和5年度には3件、令和6年度には6件を受け入れており、実際に生徒の様子を見ていただくことで、本校が創り上げてきた価値を知っていただいている。身近なところでは、本校同窓会に対して、総会で探究発表の機会をいただき、取組への理解をいただいている。また、本年度は探究の成果発表会を広く校外の方へも公開した。今後、リアルな姿をご覧いただく機会をさらに充実させていくほか、本校ホームページ等のソーシャルメディアを活用した情報発信にも注力していきたい。それとともに、再生の一步を踏み出した本校の取組について、引き続きたゆまぬブラッシュアップを重ねていくとともに、伝統、文化として受け継がれていけるようにしていきたい。

(2) 自走計画

今年度で、県からの財政面での支援は終了する。その支援により、「知の探究」の根幹をなした信州大学連携ゼミといった事業が展開できた。また、生徒の学びのモチベーションを向上させる取組は引き続き実施していく方向で、現在準備している。

そうした状況について、本校同窓会の方では理解を示し、当面、事業継続を賄えるだけの財政面の支援を約束してくださっている。また、信州大学の荒井先生や探究コーディネーターの宮木さんなど、これまで人的側面で支援をいただいている方々からも、継続してご支援をいただけることになっている。来年度以降、より質を高めた取組にしていけるよう、尽力してまいりたい。

7 令和6年度（最終年度）の事業実施体制

(1) 令和6年度の研究開発の実績

① 取組の到達目標(又は仮説)、実施(活動)日程及び内容

【目標】

- 「骨太のリーダー」の資質・能力のさらなる明確化、共有化
- 「深志らしさ」を追求した探究活動の構築

【実施(活動)日程及び内容】

1) 1年生課題探究「深志課題探究ゼミ 2024」

実施期間：4月～3月

内容：探究部が中心となり、1年次は自らの探究テーマを設定するため、様々な角度から授業内容を企画立案。探究コーディネーターの宮木さんにも助言をいただくとともに、活動に参加していただく。教員側のファシリテート能力向上研修も兼ね、学年会で授業の進め方を共有し、正副担任によるTT形式で授業を進めた。

4月 探究学習ガイダンス 係による zoom での一斉ガイダンス

- ・一年間のスケジュール、概要説明、前年度の先輩の探究について知る 等
- 本校の探究学習では何を目的に取り組むのかのマインドセットを行う

5月～7月 探究サイクル実践 ミニ探究

- ・一般社団法人 KOKO の田嶋さんによるコーディネート
「家族の困りごとを解決するためのアクションプランを考えよう！」という立て付けに乗り、探究サイクルを2週回した。都度、グループで共有したりフィードバックを行いながら、PDCA サイクルを回すイメージを養った。

7月末 探究ウィーク 詳細は後段3)

夏休み 探究型キャリア研修 詳細は後段4)

- ・10の企業の他、信大医学部附属病院での研修や自らつながりたい研修先にアポイントメントを取って参加 等

8月～1月 テーマ設定に向けた様々な授業

2月 探究グループ作成 グループ探究テーマ設定

3月 2年生探究発表会聴講

- ・松本県ケ丘高校・松本蟻ヶ崎高校との探究コラボ

2) 2年生課題探究「深志課題探究ゼミ 2024」

実施期間：4月～3月

内容：探究部が中心となり、2年次は自らが設定した探究テーマについて1年間かけて探究活動を行った。

今年度は「社会とつながる」ことを目標にし、自らの考えていることがどう世の中と結びついているのかを実感し、自らのキャリア形成につなげるというねらいで設定した。

4月 テーマごとゼミ構築

5月～1月 ゼミ活動

- ・ゼミ顧問(担当教員)、ゼミ長(生徒)を決め、ゼミ毎に教員とゼミ長が打ち合わせを行いながら探究サイクルを回すための日々の活動計画や授業時の内容を企画立案。

例) 探究の進捗状況共有、文献調査、次のアクションに向けたディスカッション、ゼミ顧問との面談、資料作成 等

- ・「地域活性ゼミ」では、松本市役所住民自治局地域づくり課の小山さんにゼミ顧問を務めていただき、毎授業に来校、探究サポートを行っていただく。

2月 探究成果発表

- ・小グループ、大グループと形式を変えながら探究の成果発表を各自が数回行う。

3) 探究ウィーク

実施期間：7/22(月)～26(金) 午前3時間

内容：探究的な学び、体験を通して自らの探究活動の土台作りとする。

探究的な学びをはぐくむ様々な企画を集中的に行った。

7/22(月)

【(2年) 探究ワークショップその1】

「探究見通し大作戦」 探究コーディネーター 宮木さん

7/23(火)

【1・2年縦割り探究企画その1】

1年生「ミニ探究プレゼン発表会」、2年生「探究中間報告会」

学年の垣根を越えてグループを作り、1年は1学期に取り組んだミニ探究の発表、2年は自らの探究テーマとこれまでの取組と今後の流れについて発表を行った。それぞれ刺激を与えあう貴重な機会となった。

7/24(水)

【1・2年縦割り探究企画その2】

「1年生ミニ探究王」「2年生探究王中間」決定戦

1・2年 「Feel 度 Walk」

前日のグループ発表では評価ルーブリックに基づいて相互評価を行い、評価が高かった生徒がオンラインで2学年全体に発表した。

また、「モノの見方を養う」というコンセプトのもと、縦割りでグループを作り、フィールドワークを行った。

7/25(木)

【探究人ワークショップ(1年)】

外部講師による分科会 全17講座

【松本深志×松本県ヶ丘 探究コラボ企画(2年)】

「聞きたい!知りたいたい!発表会」「テーマ発想★ワークショップ」

2学年全員が松本県ヶ丘高校を訪問し、生徒同士での探究グループワークを行った。

7/26(金)

【(2年) 探究ワークショップその2】タイプ別分科会

(リサーチ型)「Excelを用いたデータ整理の方法論」信大経法学部 廣瀬教授

(クリエイティブ型)「ものの見方ワークショップ」伊藤石材店 伊藤さん

探究テーマの系統毎に講師をお呼びして、活動を深めるためのワークショップを行った。

【(1年) 探究ワークショップ】

「夏休み探究種まきワーク」

「夏休み探究型キャリア研修分科会」

夏休みに行うアクションのためのグループワーク、キャリア研修の行き先毎の顔合わせ会や、事前ワークの共有などを行った。

4) 1年探究型キャリア研修

実施期間: 7/31(水)以降、随時

研修場所: 資料集参照

内容: 地域の企業、公営施設、大学、病院等が日頃向き合っている「答のない問い」についてテーマを設定していただき、生徒たちが一緒になって考えることで「予測が困難なこれからの社会」と「自らの探究活動」を結び付けて考えることをねらいとした。

また、学校がお願いした研修先にとどまらず、生徒が自ら設定した研修、訪問先も選択できるようにした。申込みやアポイントメント取りなども生徒が自ら行った。

5) 1年信州大学連携ゼミ

実施日: 10/5、10/26、11/9、12/7 (土・午前)

内容: 信州大学の教官、学生、院生をファシリテーターとして、“ゼミ活動”の形態をとり、実際の講座内容は担当者に委ねて実施した。11講座(資料集参照)。講座

内容は、講義、演習、フィールドワーク、ディスカッション、プレゼンテーションなど多岐にわたり、文理の枠にとどまらない様々な知識や情報に関して学んだり、他者との関係性の中で自分の意見をまとめ、協調して課題解決を図る活動を行ったりする等、普段の授業とは異なる学習活動を体験した。信大連携ゼミを通して、論理的思考を遂行することに自信を深める等の効果が確認できた。

6) 2年深志教養ゼミ

実施日：10/5、11/9、12/7 (土・午前)

内容：本校教員が中心となって企画・運営し、必要に応じて外部講師の招聘も行った。教科学習の発展的な内容や文理融合や教科横断的な内容を扱い、知的好奇心を刺激し課題探究的な活動を進めることができた。ワークショップの活動を取り入れたり、生徒中心に企画・運営する自主ゼミも合わせて実施したり、主体的な学びを促した。開講講座は資料集参照。

7) 2年課題探究発表会

実施期間：1月～2月(合計3回)、全体発表3/5(水)

内容：プレゼンテーションスキルの向上も意識し、生徒自身が複数回の発表の機会を持つ形で実施。都度振り返りを行い、ブラッシュアップした。教室にてグループ型の対面発表を行い、相互評価活動を取り入れつつ、最終発表会での登壇者を選出。全体発表会では、外部審査員をお招きし、1・2年全体や外部の方々も参観可能という形式で行った。

評価ルーブリックについては資料集参照。

8) 同窓生特別講義

実施期間：11/15(金)(46回生)、11/22(金)(26回生)

内容：本校卒業生を講師に招き、進路選択の岐路に立ち、これから人生を切り開いていく生徒に対して、深志で高校生活を送った先輩として講演いただいた。今年度も卒業30周年、50周年の卒業生に依頼して実施した。卒業生それぞれのキャリアに裏打ちされた話を聞くことで、生徒たちの大きな励みと気づきにつながった。

9) 自主活動の奨励

ア 各種コンテストへの生徒派遣

実施期間：通年

内容：数学オリンピックを始め、情報オリンピック、パソコン甲子園、缶サット甲子園、全国高等学校文芸コンクール、高校生の税に関する作文等では、表彰されるような成績を残すなど、自ら学校外で活躍している生徒の活躍を取りあげて、その成果を学校で共有した。

イ 京都大学ポスターセッションへの生徒派遣

実施日：3/15(土)

内容：京都大学が主催し、全国から参加する高校生によるポスター発表「京都大学ポスターセッション2024」で、本校生徒2名が課題研究の発表を行い、ポスター発表を通じて高校生が日頃の課題探究の成果について意見交換を行った。

ウ 信州つばさプロジェクトを活用した生徒の海外派遣

実施期間：8月～3月

内容：県教委が県内の高校生を対象に実施している海外留学の支援プログラムを活用し、今年度も県企画に8名、個人留学制度で3名の生徒を海外に派遣した。派遣先は、台湾、カンボジア、マレーシア、韓国、カナダ、ドイツ、オーストラリアであった。

エ 信州サイエンステクノロジーコンテスト(科学の甲子園県予選)への参加

実施日：11/16(土)

内容：創造性・協働性を培う場として、今年度も参加した。準備の過程では、生徒

が主体となって創造性を発揮しながら事前課題に取り組んだ。情報の筆記部門で1位を獲得した。

オ 天文学実習@東大本郷の実施

実施日：8/5(月)～6(火)

内容：天文学について、最先端の研究に取り組んでいる研究者から実習を通して専門的な知識を学ぶとともに、友との深い対話を通して理解を深め、課題の設定や課題解決に向けた追究の方法、思考したことを表現する方法を学ぶことを目的に、本校地学会及び物理研究会が主催して、愛知県刈谷高等学校と実施した。研修の成果報告は、3月2日(日)の県教委主催の信州サイエンスミーティングでポスター発表を行った。

10) 進路実現に向けた取組

ア キャリア研修

a) 1年探究型キャリア研修(前述)

b) 2年キャリア研修旅行

実施日：10/23(水)～25(金)

内容：さまざまなことがらを横断的・総合的に学んできた2年生という時期に、首都圏の企業見学や大学見学をすることで幅広く多様な価値に触れるとともに、視野を広め知見を深めるために実施した。生徒の進路選択の幅を広げる一助となった。

イ 海外研修

実施日：3/25(火)～28(金)

内容：海外の人との交流を通じて、考え方の違いを知り、相互理解を深めるとともに、実際に海外に行くことで異文化を肌で感じ、視野を広げるために、今年度も台湾への研修旅行を実施した。事前学習では、オンラインを通じて現地の高校生と交流を行った。

ウ 特別学習会

実施日：(2学年、Mウイング)7/29(月)～30(火)

内容：日常と異なる環境の中での学習を通して、自学自習の学習姿勢を身につけるとともに、新学年に向けての学習姿勢の意識の向上を図るために、外部講師を招聘するなどして実施した。

11) 授業改善に向けた教員研修

実施日：随時

内容：教員の教科指導力向上を目的に、同僚の授業を参観や研修会を実施した。知識及び技能はもちろんのこと、思考し、判断し、表現する力の育成に向けて、ICTの活用(ロイロノートの研修)や発達障害を抱える生徒の支援の在り方について、全職員対象に研修会を行った。

12) 長期的視点に立った研究開発体制づくり

実施期間：年間

内容：探究・キャリア教育部が、本校の探究活動の課題を明確にした上で、その解決に向けて全職員が関われるように、模擬授業や探究新聞、Google Classroom等で情報共有しながら、主導的に改革を進めた。また、探究コーディネーターを導入し、外部からの支援と視点から、本校の探究の深化と教員の負担軽減を図った。

② 目標の進捗状況、成果、評価・検証

1) 探究の改革

取組内容や成果の詳細については、資料集をご覧ください。

ア 知の探究

事業内容としては、信州大学連携ゼミ、深志教養ゼミ、尚学塾などである。成果からその一部を抜き出すと、以下のようなものである。

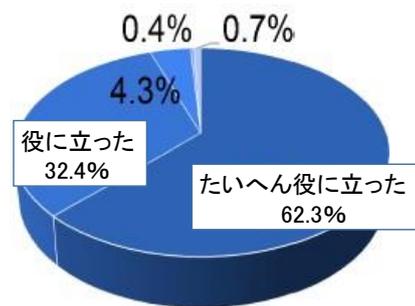
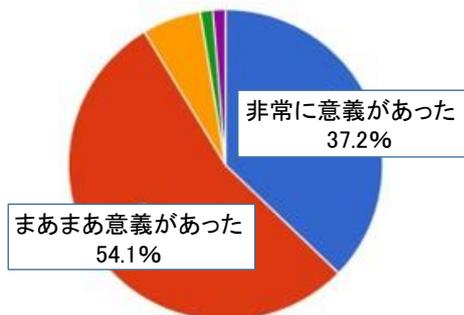
【 I 知の探究】 (生徒対象アンケートより)

1年生対象 信州大学連携ゼミ
(R6.12.07実施、231名回答)

2年生対象 同窓生特別講義
(R6.11.15実施、281名回答)

Q 信大連携ゼミは意義があったか？

Q 講義内容は進路を考える上で役立ったか？



本取組により、通常授業の枠を越え、高度な学問を追求している人たちや社会で活躍している人たちとじっくり語り合うことで、生徒の知的好奇心を喚起し、学びへのモチベーションを上げることができた。

また、専門分野の内容や人生経験に関する内容は、多くの生徒にとって、その後の進路選択に役立ち、新たな探究心に火をつけてもらえた貴重な機会となった。

イ 課題探究

今年度の重点項目をまとめると、以下のようになる。

1) 深志らしい探究活動とは？

- ・教科学習で身につけた力がどう世の中と結びつくのか、自分がどうやって社会で活躍するか、自らの生き方、これらを、探究学習を通じて外とつながることで経験させた

2. 全教職員が同じようにコミットできる仕組みづくり、目線づくり

- ・全職員が共通認識と理解をもって取り組める3年間の「深志探究プログラム」作り
- ・1年…昨年度のルールをベースにブラッシュアップ
- ・2年…近い探究テーマごとのゼミ形式による授業運営、ゼミ長会
- ・3年…国語・社会・英語、音楽・書道・美術による横断的な探究学習

【キーワード】

- ・(生徒) 縦割り
- ・(先生) 全員参加
- ・(生徒も先生も) 持続可能

探究学習においても、自治の追求を意識した取組を展開した。例えば、今年度から縦割りの探究活動をスタートさせた。かねてより主に生徒会や部活動では、先生から指導されることなく、先輩から後輩へ「縦のつながり」でやり方などが受け継がれてきたが、そのシステムを探究の場面でも生かし、より生徒が主体的に、協働的に関わることで、調整力、協働性、ファシリテート力、プロデュース力等の向上できるように工夫した。

また、生徒の成果発表の場として、3月5日に探究成果発表会を実施した。今回は、初めて広く校外の方にも公開した。マスコミによる取材も5件ほどあり、社会からの関心も高かった。成功裏に終えることができた。

しかし、課題も残る。こうしたシステムは今年度初めて導入された。生徒にとっては教員主導のものであり、自然に受入れられ実行できるまでには、時間がかかりそうである。今後、生徒ともに試行錯誤しながら定着を図ってまいりたい。

2) 評価・検証

5年間の成果をまとめることは困難を要するが、生徒の受け止めをまとめると、以下ようになる。

5年間の歩み

生徒の受け止め

☆ あなたは学校生活が楽しいですか

	令和6年度10月	令和2年度9月
1楽しい	621(78.4%)	541(68.4%)
2どちらでもない	155(19.6%)	215(27.2%)
3楽しくない	16(2.0%)	35(4.4%)

☆ 探究学習を通して学んだこと

- ・自分の将来の夢について考えるきっかけになったと思う。・普段の生活が有意義になった。
- ・今後の生活に活かそうなことを学べた。・知らない学問に触れることができた
- ・物事の考え方が分かった。・普段の学習につながることもあった。
- ・自分が知らなかった新しい発見をすることができて、普段なら気にすることがないことにも気づくことができた。
- ・学校の学習に活かそうなことを沢山学ぶことが出来た。
- ・自分がこれから何をすれば良いのかがなんとなくわかった
- ・自分1人で物事に興味を持ち、それを考えるだけでは得られない、たくさんの新しい考え方を学ぶことができた。
- ・自分の想像したことのないやり方を学ぶことができました。話し合う時間があり、学びを深めることができました
- ・生きていく上での新しい視点、知識

10

本校では、『「自治の校風」を追求し、その理想の具現化により、骨太のリーダーを育成する学校づくり』の研究テーマの下、自治の伝統を事業の中に取り入れながら、

○ 現在の学びと将来の学びの深い関連性を理解する

○ 学びへのモチベーションを上げることで、受験に向かう意欲・精神も高めるを重点課題として取り組んできた。

その成果は、上のように生徒にとって学校生活への肯定的な評価として表れてきたり、特に「現在の学びと将来の学びの深い関連性」といったことや「学びへのモチベーション」といった点で、自分の進路実現に向けた意識にも大きくプラスの影響を及ぼしている様子が記述からうかがえる。

また、例えば、講演会においても、質疑応答での議論が活発化し、自分の興味関心と講演の内容とを結び付ける力、将来の可能性を探る探究力が向上してきた感を肌で感じる事ができ、一定の成果が得られていると考えている。

③ 取組や成果の情報発信、普及に向けた取組

本校では、これまで実際に生徒の様子をご覧いただくことが取組の状況を一番理解していただけるものと考え、積極的に視察等の受入れを行ってきた。特に本校の取組は県外から注目され、今年度も6件の視察を受け入れた。資料集をご覧いただきたい。

また、公開授業、体験入学、学校評議員会等の場面においても、「自治」による学びの姿を可能な限りご覧いただけるように工夫してきた。探究の成果発表では、今年度、初めて広く校外の方にも公開した。さらに、本校同窓会に対しても総会で探究発表の機会をいただき、取組の様子を披露させていただいた。同窓会からはご理解をいただき、来年度以降の財政面での支援をいただけることになった。(資料集参照)

ソーシャルメディアを活用した情報発信では、現在、本校ホームページの校長通信を通じて主に発信している。今後、リアルな姿をご覧いただく機会をさらに充実させていくほか、他のソーシャルメディアを活用した情報発信にも注力していきたい。

(2) 校内実施体制

カリキュラム・コーディネーター氏名（大林 慎太郎）（教科：外国語）

実施項目	担当責任者	実施時期、学年
1) 深志課題探究（1 学年）	下川 治美	通年、1 学年
2) 深志課題探究（2 学年）	伴野 大悟	通年、2 学年
3) 探究ウィークコーディネート	大林 慎太郎	7 月、1・2 学年
4) 1 年探究型キャリア研修	大井 幸代	8 月、1 学年
5) 1 年信大連携ゼミ	渡邊 絵	10～12 月、1 学年
6) 2 年深志教養ゼミ	森本 大輝	10～12 月、2 学年
7) 同窓生特別講義	奥原 靖彦	11 月、1・2 学年
8) キャリア研修旅行	水野 好美	10 月、2 学年
9) 科学の甲子園	鈴木 博之	10～11 月、1・2 学年
10) 全般	大林 慎太郎	通年、全学年

(3) アドバイザー

氏名	所属・職	助言分野
荒井 英治郎	信州大学 教職支援センター准教授	・信大連携ゼミコーディネーター ・効果検証の設計、及び分析・評価 ・課題探究学習実施への助言・指導

(4) 連携コーディネーター

氏名	所属・職	支援内容
宮木 慧美	一般社団法人 KOKO 共同代表理事 探究コーディネーター	・課題探究学習の企画立案助言 ・講義、ワークショップ講師 ・外部との連携コーディネート
中澤 勇一	信州大学医学部地域医療推 進学教室准教授	・医学部医学科志望生徒に対する 研修支援・助言

(5) 実践校ごとの連絡会の実施実績

第 1 回	
実施日・時間	7 月 23 日（火）16:30～17:30
参加者氏名 （所属・役職）	信州大学准教授（アドバイザー） 荒井 英治郎 県教委事務局学びの改革支援課 佐久 浩信 松本深志高等学校 校長 石川 裕之 松本深志高等学校 教頭 奥原 靖彦 松本深志高校 探究・キャリア部長 大林 慎太郎
協議内容	1 本年度研究開発進捗状況の確認 研究開発実施計画書をもとに年間スケジュールについて確認した。 2 事業の取りまとめについて意見交換 ・外から見た人がわかる形にしていくことが求められている ・深志の取組による成果のロジックを言語化する必要がある 3 実践事例報告会の打合せ ・本事業に参加しようとした当時の振り返り（なぜ手を挙げたのか） と、どのように課題を解決しようとしたのか、実際生徒はどのように 変容したかをまとめる

